玉手箱 巻六

13
1898
6

へ 13
1898
6

坂田金平志平記巻之六

目録

一魔王會東嶺為評定事
一洛中変異付公平ゑ拐事
一妖鬼化后宮為二人事
一公平憑墓付艶書事

坂田金平去平記巻之六

麓王舎東家の事

そのころ洛中に一の不思議あり。或僧東山清水に観自在菩
薩を信じて毎日参詣する。扨若々立てげーろろ
山堂の傍ふ面の時分を待居たるが。角て日脚よ暮る
ろ。ぐよりちうば今夜は山堂あく閉せうと念珠し
て寺社乃滝の流ふ六蓮丸堀をくぐり。清水寺に参
詣するこ雷の眠を見ろ居るあり。金平に変
撞くもう面風迅く吹く雲乃上ふ車を乗し馬を引る者
して来るもう来れり。あれ怪ろし何者やらんと思傍肝

を清し給ぐ人をば勿論として塵垢にも覚金を
撒き樓閣出来く。庭には腰を引。門外に幕を張。
爰より十方より来る所の車馬乃客二三千もあらんと見え
るるが如く居流て。上座に一人の大人あり。を容貌
常人にあらず。年二十丈もあらんと覚ふ頭は禿山
十二の面よりはづり。四十二のひたいにて赤たる赤蓮の
花の眷属にも皆見えたり。八臂六足にして弦乃楯
と鞭三面一体にして重代と名せり。座定て後
の大人立ち向かくやうるへ。此度帝釈の軍に打勝て
日月を掲る勇猛乃頂に有て一足は大海を踏き

で三界に家なし地の中にを日本に集義土に小国をうとう
天照神に契約して三宝を対じて拵へ。我仏を
[illegible]紀乃利生乃[illegible]ふにも毎日若干に眷属を[illegible]
[illegible]伝ておる慢の若に入望て[illegible]
[illegible]ふ[illegible]て[illegible]と[illegible]る下[illegible]上乃[illegible]ふ[illegible]て[illegible]
[illegible]て[illegible]教[illegible]
[illegible]ん[illegible]ある[illegible]。天帝[illegible]屋に[illegible]て[illegible]土[illegible]侵[illegible]
ある[illegible]に代て[illegible]日本に[illegible]
[illegible]て[illegible]ら[illegible]全[illegible]
[illegible]ら[illegible]出て[illegible]
[illegible]ら[illegible]出て[illegible]
[illegible]ら[illegible]出て[illegible]

よ浦くを経て紀伊国に紀和雄と云ふる者一騎にて
ふ祝をまつ京しく攻つ事時人会をぞくに集が
清らる所の西方邪を法して俄に額を撞くこまにけりて
陽形鬼と号を。其は一列の金鬼風鬼水鬼と左右の
翼くして。容易天宮に推寄べくと勢ひをぞやらる。
大人中のてらくに海の西方人召れ及ぶ所あるを。我西鬼
をなして三千界を見るに。南閻浮提の家居は坂田公平
こそ一国なれ。彼が魂魄は源氏の四天と合戦。軽捷
幸を天も及べくぞ。等閑に出遣てるべ勿大侯と考ふ
べく能く情儀てゆ此変あるべ注進すべくと云

きば名を西に死去ぐ。皮侯はぐ〳〵是を考へ乃色
ふ墨くく人心地もなりをけるぶやうくくして清めちと立ぬる

治中変異付公平を扶事

嘉徳二年神無月極一天揺動風神の方より吹
来て。林木を根ながら倒し。豊社仏閣の瓦数万枚九
牛馬ちに特に風かし
梅桜海悪く地面震。紅人牛馬ちに特に風かし
出ぬまば大西を仰ぐ〳〵雷電炎〳〵落て。かの門の
水逆巻大波騒よ。あまて治中は民屋かに乃ぞ。樓裏
紀河百貫の屋形く大波の為に破損。富士の為
よ去解うして鎌倉の飛人の

源のよろ義
ひきめとねゝ

三遠川より流れを縄張合の苦しもかくやと思ひつゝ新
田風情を見て希代の孫幸ひ〻男子を生に赤三条の
林野歩を言雄壮聖の獄の方より車輪のごとく成
光を八方に義満一つ馬を発揚して日月の光を
暗のごとく兵事連日に及て矢軍の光を光和の内
より発出せり。北朝より風聞に逆対それど。帝勅を出せり
武士ふ行く鎧固めをべし〻て武将義満に勅使を
頼義勅を感じて甲冑を着し弓矢を帯して四
天王を拝し大庭に仕候ある打を出力をいて 弦
護をべし〻き給を給て楯嶽に檀とかぐら護

摩ゝ烟振旗の書法殿に書て いかる亜魔霊化なり
在陣化をべし〻合人ごとうう。ちも光れも雲騰
も晴ざるし入しに武威を以弦定なる武れ
武震殿の孫庭に立弓と矢を射て歩毒ひ毒巾と
白眼で兵行を源義義に義に矢を射
いろ。暮月の猛矢引き切りかつて放る人で仲の
光和庭に落ひるく。そ長二丈半一面三眼
みて毒巾亜鬼頭。暮月矢とうて義に投
つけ。この眼を睨げ義と遊しみ〻。頂帝釈の
軍に歩揚て立三天を掌みる大魔王は勅合

みえて日本とび山湯殿鬼が島履不り絶つゝ。後り栗
蔵主の小図樫が軍功よりかたをとる。是対天智天皇の
いまゝに義承の手方ゟ組しけ山に来臣せ一ゟ。和雄が一
員のうゟ能き強男より場うゝ事。鬼の仲間あくゝ
和尊ゝ〳〵〳〵遣ゞゝと。帝釈の軍勢
漲ゟるまで今まゝくいまゝ帝せうゝで天ゟ成抱く
場う。命み事ハ大魔王の使ゟ伊とべゝと和ゝると。
五平遠さゞ稲まあゝゞくまう。鬼のそらびと抓ぐ
家如ゝ〳〵〳〵だ。たゞゝ〳〵たゞゝひるゟ。振るゟち公
平が頭を抓でよゝんとするとゝ〳〵入て。ゟゞゝ抱ゟのき

去奴の日本に五ゟまがみゝとゟ。鬼有ます。
あゝまと大魔王に出来ゝて中くゝ平定ゟけまと。白河へ
嶺と投居者貴ゟ上ゟ家如ゝ〳〵大地とゟ潜ゟ久ん形い
消て見へゞるゟゝ〳〵いゞゞと見る。和ゟ中に寄みて
今度の御宝ゟ大魔王ゟゝまが事と一書に勅宣有しゞ
ゟ及ゟるゟゟ。強曲ゟ。去ゟゞゝ自余の鬼ゟ猶ゞ。
貴ゟいをのまを抓堅強男の去来ゟせんでしゟゝ〳〵
矣寄て光波て失ゟゟる。来ゟる風もやゝ大雲
晴くゝ白日晩くゝこゝ〳〵まで。上一人ゟ下万民ゟまで
今ゟゞゟゟ五平ゟ勇力。天晴ゟ和の宝やと称賞せ

ぬるなりけるとかや

妖鬼紀后宮為二人一事

洛中の妖怪既に撲滅すといへども。兵庫頭が武勇に
よりて怨霊なども誅国なしへしとて武将某と率して
宮門を守るの外しを神無月廿日頃より屋乃繁き
本も木枯て落葉にちる頃ゟ所の色濃くすゝ定め
なき時雨ぞいとゞ小夜嵐。簾に颯と吹きて因るべ。殿
中燈一度に消たり。宮中の侍郎に枯るゝと進
まゐらせしや清后二人に化して。金翠の粧ひ芙蓉
の眸蝉蛾の鬢のこぼれかゝる風情までかゝる遠

つゞまし一宇に遠き神をひそ玉殿をく居よりまかりなんぞ。
帝を始め奉り三公九卿殿上人ぎいづれも殿中所々に隠れ
を。関白公信房は元龍魂とい病の介分なる事なりと
皆及しが。是は正しく変化の者の取りつきまで幾度もを
武勇に勝る兵庫頭に昇殿を許されて正体を現すべし。
と。斯て宣下有しが。兵庫頭を召て閑殿に候ありて二人
乃后宮を左右に座せしめて玉顔を同じうせん容貌気文
立振舞から声音までかも遠からざれば武勇も竟に
をかひて是非を心にかけて思ひ煩らひ一方へ
推よ変化に事たる事。仕様なれば此兵庫頭が腹切まで

そこ一方づゝ打殺てくれんと例の鉄棒かゝらんとまつべく
あら雅やさしや父なる公平后宮へ申す実白公の御姫君が恐気も
附ようぞと撃しまで公平ハ眼といからし重を含ミ
ぢらしたんの紅鬚逆立て百足の怒毛のごとく筆を振て
阿責し関白殿思案し給ふハ后宮よハ幼稚の時より
の膝のひとつ有ほどのかさ疵のあるが今にのこり
あるもせんと室へ入て立より見すれば疵すこし有
まぞあり。まさ波やと近れまく実白殿ても后宮有
して変化あまとるその下より忽ま鬼神
と成殿下に飛かゝると公平さま例さのぎ面ふむぞ

と組。悪神も復の本殿神の御前もちを考て選人切の入
さる痩鬼度涅形の術も今度ハ吐二出ませど思ひやくしくと
組合足高殿中を轟ゝ。生に所勢ハ嵐のごとく終に鬼神を
組留ゝる。所を左手を足と胸板をゑんぐんとおさへべし
天王立かゝり四足を押公平上に乗かゝる。武ねる力振上
あんで是ハ落とみへし眼とみ前に身をうけ。飛かゝらんと
するを。公平頭髪を握て了おし。枢の陰毒を吹かけると
庭前に飛下礎よ押当て力よ任押付べ頭蓋微塵よ
割れ礎ハ二つにわりつ。御殿も終く事寿扇感
錦すぎ。前代未聞の働き叢賞ハ先よ何とべし

山姫ありて姫の姿をうかゞへるさまをみる

公平恋慕 付 艶書事

色と名てふものゝ世中に恋といふ字ほどかしこきはなし
今ぞ絶えぬ曲者よ。男ざかりの坂田氏金平公平ハ
色に情の魔性ありし附奥の外殿を見まもりて後籠
の戸ざし追風に梅津の内侍とかいふ人ありしかども。
芙蓉の眸丹花の唇みどりの髪へはる眉の匂ひいはん
むくつけ男の君も流石に岩木ならねバ絶えぬ恋の弦
敵に攻付まて力を。深く労て面瘦て。お仕もせずし
錦人にも負ぬと云いしに。恋慕のやるせなさに乃ち現る

底しも治まりぬ。ほしさしかたち草。寂しき斑ありける。武将
公平が病悩と安否曲薬頭を使さまし手を病疾を診させの命
医師の方へ申しける。公平日来の強き手と打遠し拙き稀も
弱形容も枯衰し。病疾の根を打かへし。武将何公事
己が浪霊に因る世病といふ病は心労の事にやうになひたれ
多年の戦労といひ齢も又若からぬさまにて能く保養を
「しくも老の文治は痛にて公平ハ打白しで彼が歓も乞ひあるを
闘しく治療あるべしで清げにあと立会議へぞ急ぎける。
彼あるを公平が枕もとに付きかゝりしに何と治療せんぞ。君も
一入にいと付きまとひ目にいふ人の病どもを吟のさまにて行きて

かれど現世の人のひいでとなる事はいつぞ昔のしるべに海恩をうる計こそ。文治頼朝男なれば福寿丸神仏の
ひいでさし。若又ひとつの事もあやせんと推しあきべ
耳えよ居ら者を低くして云ふ人ぞ風情と人なるふる
こと風ふんぢんの日くかとうく人のふいみやはふかけあ事
りやひ。さもあくで仏の面若くうべき。月は隔てく中かと
ひはは事なきでは乃こと法包ひを罪つうひるく。光南ひ
酔しうべ。云平枝はあ多ひ。ふこてもあるあ。今ハ行
とうつむびき。見れ大内ふく変化ふ居の浦さて多みれ
貴女の庭き中ふ。梅坪の月侍とやうんの侍いつ年ふく。ひそ

やうのうるる不高ふと澤くゆうしが。行とやらん。霜月とうき
市は主人の新付いうでくく簡南く眼よ遊ろ隠せまろ。心
もとろうるやうにそうるハ世上よりやら京墓とやんいつ拍。
我ぞ〻墓なひんやまうひやこ。晴ようき人の侍ふかく
ふ居先ふふやうに病ふ。人月ふをうやそれぞと見ゆるう
和しやこ。夜ハ神ハ新さ〻人てう明よるる。又居うる若男ハ
意ととるる事ハ鬼ハ月ふを海ぞと。居ふと行ハ笑る又新
ふもと思ひしうべ。ふ事ふうてふいく安ふ事ふてひぞや。事
ふ赤夜紅の若彼方をん貴あふ女房ひまく。ふと何ひて
まつ〻ふん。後ふ侍ハ円侍の正事ハ世ふまる紀英月貌ふく

内侍ども
こゝろく
文をよる

あつぶの
るゝ
きんまな
まり
文とよる

は露りありくとひ知りしは。日がな雲の上人花結ひとし玉乃
つましくは。禁裏仙洞の美人九嬪更衣を花のを
とへば世の中に武八月もかりそめの小萩枝も色
あるみすの内の花我おちにさしたる上しる紅の秋の女郎
花志ろく咲かゝし名を含し菅原時の夕白の也。見るより
思ひの種人菜と和らかして見て揚く此花たとえりくふ
なくらむとつは。梅は匂ふて枝たとやらず。桜は色を
ますたことまるもなし。柳は風をとめ緑のいと露の玉あく
枝ことさらに匂ひとりす世をなし。梅が香と桜が色に
揚して柳の枝にさかせたらんぞそ宜ぐしけちまへえらん

やとて。花のもとへの数まとひてせたまへさらし上へや見中く
遊ぶ。流石日本一の稀人の名を折すなは二順紙今江戸の
付。君も帰るとは言伝ぐ此ぬしまく不思議なさん。心徳も結
すへ去子がら達人みは心をも此徳ぜんみ事まで此消息
を送りかんやといひるまで。工手蔵破し起す此事也なり升
みくは年佳負すうる花綴の字は梅重ね一命を発気系
せん万事は軽文活庭。未練によみまかるすは名げきをさおら
じん座のうけとまてこそ月中さんと硯ふ。上せ先一筆
稽古と本卜へきやし紛らまとて。文活来あそいやく上藹
の江戸へ花は掲出へおくらば。いふみとことなやまらふ古めか

ゆくと入くゝ毒のくるやつてこゝぞ入くゝ毒
ゆくもで。こゝ中ゆくりゝ爭かゝるゝかつぞ来てゝつゝ
武士の矢うゝにくゝろの小袖のとも。袖の裏玉ちり
てゝ。ちゝゝ袋のとのづゝゝ。切よまぶゝゝ玉髮に大象の
鬱ゝて。くゝゝとわもぐゝ乃ゝとぞ出ゝ玉髮と
和ゝ。ゆゝゝ命といふそ止ゝ乃世よ。作やの人
ゝ同くゝゝん。沢の海の毒ゝゝ大蛇の接と戦破く
お生ゝゝゝゝ。人百ゝゝ及をいふ西異神
よ生ゝゝくも。絶よゝんの刻ぞゝゝよゝゝおゝや
変化五居の涙ゝ。言時の花乃夏ゝゝゝゝゝ

ゝ五絃と俗和ゝゝゝ。前ゝゝゝ抓
付ゝて。身ゝゝ。ゝゝゝゝ。振ゝまゝゝせ
ゝゝ。京ゝゝゝゝんゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ
病ゝ。ゝゝ抓の袖ゝ。ゝゝ。夜ゝゝ同ゝゝ
げゝ。言のゝゝゝゝ。ゝゝゝ紙ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝ。舞ゝゝ五仙よ入ゝゝゝ。ゝ乃
宣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝん。ゝの赤ゝ付。こよ世界ゝゝゝゝ

たゝんで麤臨俗産の[illegible]
どゞやうとをるゝも掘せうぞ。一丈八尺の鉄棒にうつくし
掘まはせたる丸て筆まうぶ。や一秋の[illegible]
[illegible]の社と行数て。異国の事掘たゝみあけ。[illegible]我
とゞ一騎打勝負ハ。[illegible]使つかゝ[illegible]
叫ふ掘ゝで脇十文字に掘[illegible]脇[illegible]と掘か
しゝ[illegible]の[illegible]を[illegible]
大麤[illegible]と[illegible]ハ万[illegible]の着[illegible]
大[illegible]も[illegible]も[illegible]
[illegible]の[illegible]

五 梅乃名あり

坂田二郎刑

[illegible]と名付て名ひゝく立[illegible]。仲立ハ女房[illegible]
付く内侍の[illegible]人遣[illegible]内侍を始上[illegible]
足[illegible]ひゝく。さとゞ云平の[illegible]
と名種。帝ハ[illegible]。[illegible]軍あり。日本一の[illegible]者ゞさ
[illegible]ふゝ[illegible]。彼ゞ[illegible]
幸[illegible]。大雪丸の孫[illegible]ど[illegible]の補佐[illegible]
内侍と云平に下[illegible]る。[illegible]
[illegible]。漢文[illegible]万里月のおゝ乃腸と[illegible]

る今身のうとかてましてかりつかる妹背
乃家ゝ分繁る加ゝ為丈自慢や御くハ新乃
迎方新御丸生きと者が吾宮云るゝ口丸打ゝ
ゝ若る夢氏搖りて居ゝ乃乃

坂田金平を東妃宮ゝ六段